

## プログラム・ノート

八木宏之

### ビゼー(カルドーツ、ミルズ 編曲)：『カルメン組曲』より(金管五重奏用編曲)

ジョルジュ・ビゼー(1838～75)が完成させた最後のオペラ『カルメン』は、オペラ史上もっともポピュラリティを獲得した作品のひとつである。原作はプロスペル・メリメの同名小説。登場人物の魅力的なキャラクターとスペインの民俗音楽や舞曲を取り入れた異国情緒溢れる音楽により、世界中の歌劇場で繰り返し上演され、ジャンルを超えて愛されている『カルメン』だが、1875年の初演は不評に終わり、ビゼーは作品のヒットを見届けることなくこの世を去った。今日は名高い序曲から「アルカラの竜騎兵」や「闘牛士の歌」まで、オペラのエッセンスを凝縮した金管五重奏のための組曲版をお届けする。

### ドビュッシー(ホルコンブ／ホルコンブ・ジュニア 編曲)：

#### 『シャルル・ドルレアン の3つの歌』(金管五重奏用編曲)

『シャルル・ドルレアン の3つの歌』は、クロード・ドビュッシー(1862～1918)が残した唯一の無伴奏合唱作品。作曲が開始されたのは1898年のことで、このときに第1曲と第3曲が書き上げられ、1908年に第2曲が書き加えられて、現在のかたちとなった。シャルル・ドルレアン(在位1407～65)は、15世紀フランス、ヴァロワ朝の王族で、長くイングランドに幽閉されるなど、百年戦争の混乱に翻弄されながらも、優れた詩をいくつも残し、中世のフランスを代表する詩人として歴史にその名を残している。ドビュッシーはテキストの一つひとつを巧みな和声で繊細に彩色しながら、旋法を用いて、中世のアルカイックな美を鮮やかに音楽化している。

### クレスポ：アメリカ組曲第1番

エンリケ・クレスポ(1941～2020)は、ウルグアイに生まれ、1960年代からドイツを拠点に活躍したトロンボーン奏者、作曲家である。バンベルク交響楽団やシュトゥットガルト放送交響楽団の首席トロンボーン奏者を歴任したほか、1974年には金管アンサンブル、ジャーマン・ブラスを創設し、金管楽器の室内楽の発展に演奏、作曲の両面から尽力した。1977年に作曲されたアメリカ組曲第1番は、クレスポのルーツであるラテン・アメリカを含む、南北アメリカの音楽文化に光を当てた作品である。アメリカ合衆国からブラジル、ペルー、アルゼンチン、メキシコまで、ポピュラー・ミュージックや民俗音楽を通してアメリカ大陸を旅する本作には、祖国を

離れてドイツに生きたクレスポの郷愁とノスタルジアが詰め込まれている。

### バーンスタイン(マリエッティ 編曲):『キャンディード』序曲(金管五重奏用編曲)

戦後のアメリカを代表する作曲家で、指揮者としても活躍したレナード・バーンスタイン(1918～90)は、『ウエスト・サイド・ストーリー』や『オン・ザ・タウン』など、劇場音楽の領域でいくつもの傑作を残した。1956年に初演された『キャンディード』は、18世紀フランスの啓蒙主義作家、ヴォルテールの同名小説を原作とする舞台作品で、音楽はオペラとミュージカルの両要素を兼ね備えたバーンスタイン独自のスタイルで書かれている。快活でエネルギッシュな序曲は単独で演奏される機会も多い人気曲。変幻自在なテンポの変化のなかに散りばめられた名旋律の数々に、バーンスタインのエンタテイナーとしての技を見出すことができるだろう。

### ケイメン:五重奏曲

マイケル・ケイメン(1948～2003)は、映画音楽の領域で活躍した作曲家で、『ダイ・ハード』や『X-メン』など多くのヒット作に貢献した。ジュリアード音楽院でオーボエを専攻した後、1967年にクラシック音楽とロックの融合を目指してニューヨーク・ロックンロール・アンサンブルを結成するなど、ジャンルにとらわれない創作活動を展開した。晩年の2002年にカナディアン・プラスのために作曲した五重奏曲は、ケイメンの音楽表現の多様さを映し出す小品で、金管五重奏ならではの柔らかなハーモニーと艶やかなカンタービレを味わえる、短くも抒情的な1曲である。

### エヴァルド:金管五重奏曲第3番 変ニ長調 作品7

ヴィクトル・エヴァルド(1860～1935)は、19世紀末から20世紀初頭にロシアで活躍した音楽家で、本職は土木技術者の兼業作曲家・演奏家であった。チェロやピアノだけでなく、コルネットなどの金管楽器も演奏したエヴァルドは、金管五重奏の領域に取り組んだ最初の作曲家のひとりとして知られ、生涯に4曲の金管五重奏曲を残した。本日演奏される第3番は4曲のうち最後に完成したもので、1912年頃に作曲された。この作品は作曲家の没後、長らく忘れ去られていたが、1977年にアメリカの金管五重奏団、エンパイア・プラスによって初めて録音され、その存在が知られるようになった。作品は急急緩急の4楽章からなり、室内楽でありながらも、交響曲を思わせる充実した構成と壮大なスケールを誇る。